

# 稲作・畑作

営

農

情

報

## これからの水管理

- 本年は茎数には場間差が見られます。茎数が不足しているほ場では、強い中干しを避けてください。
- 幼穂形成期に土壤水分が不足すると、1穂着粒数が減少します。中干しは幼穂形成期までに終了し、中干し後は稲体の活力維持のため、間断かん水とします。
- 減数分裂期から穂ばらみ期にかけて、冷害の危険性がある低温（日平均気温20℃以下、最低気温17℃以下）が予想される場合は、予め前歴深水処理（幼穂形成期頃から10日間程度、25℃程度の水を10cm位に保つ）で、低温対策を実施します。
- ★ カドミウム含有米の発生が懸念される地域では、間断かん水をせずに**出穂期前後3週間は湛水管理を厳守**してください。

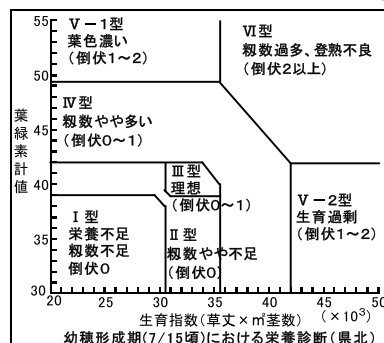
## 栄養診断による追肥の判断

- 幼穂形成期の極端な葉色低下は、1穂着粒数の減少・有効茎歩合の低下を招きます。幼穂の発育状況と理想生育量を確認し、生育・栄養診断を必ず実施して下さい。
- 幼穂形成期に葉色が濃く草丈が62cm以上の場合、倒伏の危険性が高くなるので穂肥の施用を控えます。
- 緩効性肥料や育苗箱全量施用の場合はこの栄養診断はあてはまらないので注意してください。

幼穂形成期（11葉期頃）の理想生育量（県北）

	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉数 (葉)	葉色 (SPAD値)	生育量 (×10 <sup>3</sup> )
上限値	62	586	11.0	42	35.6
理想値	60	552	10.8	40	33.0
下限値	57	519	10.6	39	30.5

※生育量は草丈×m<sup>2</sup>当たり茎数。



## 気象変動に対応した水管理

- 出穂期から開花期は最も水を必要とする時期なので、出穂後10日間は湛水状態にして水を切らさないように管理します。その後は間断かん水とします。
- 気温が30℃以上になる場合、根の機能減退を防止するため、用水が確保できる地区ではかけ流しかん水を行ってください。また、フェーン現象等で乾燥した風が強く吹く場合は、湛水状態を保つことにより稲体の消耗を軽減します。

## 病害虫の防除対策

### 【いもち病】

- ほ場の見回りにより早期発見に努め、病斑を発見したら直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ブラシン、ノンプラス等）を散布してください。

### 【斑点米カメムシ類】

- 病害虫防除所の発生予察情報によると、本年は発生量が多いと予想されています。
- 稲が出穂する15～10日前までに数回、畦畔や農道等を対象に地域で一斉に除草を行い、イネ科雑草の除去に努めてください。
- 水田内にホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエの残草があると、アカスジカスミカメの侵入を助長するので、水田内の雑草対策を徹底しましょう。